

# 教育事業等報告書

平成30年度



独立行政法人 国立青少年教育振興機構

国立赤城青少年交流の家

# 目 次

## 地域力向上事業

- 〈看板事業〉・限界突破キャンプ . . . . . 2
- 〈生活・自立支援事業〉・チャンス フォー オール チルドレン (宿泊・日帰り) . . . 6

## 幼児期の体験活動・読書活動普及啓発事業

- ・親子キャンプ . . . . . 12
- 〈民間企業等連携事業〉・育パパ&育ママ応援ファミリーキャンプ . . . . . 14
- ・『育つ力・はぐくむ力』をめざして . . . . . 16

## 普及啓発事業

- ・小学生ラグビー交流会 . . . . . 18

## 青少年教育指導者等の養成・研修事業

- ・ボランティア養成セミナー . . . . . 20
- ・自然体験活動指導者 (NEALリーダー) 養成事業 . . . . . 22
- ・教員免許状更新講習 (選択領域18時間) ①②③ . . . . . 24

## 国際交流事業

- 〈文部科学省委託事業〉・日独青少年指導者セミナー . . . . . 28
- 〈文部科学省委託事業〉・イングリッシュアドベンチャー①②③ . . . . . 30
- ・イングリッシュキャンプ (中学生対象) . . . . . 34

## 広報・利用促進事業

- ・「体験の風をおこそう」運動推進事業 (出展ブースを含む) . . . . . 36

## 「 限界突破キャンプ 」

～今年の夏は新たな自分と出会える～

### 1. 趣旨

7泊8日の移動型キャンプで、登山・自炊などの活動を、仲間と共に、最後までやり抜くことを通して、何事にも自信を持って取り組める力を育む。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期日

事前キャンプ 平成30年7月15日(日)～16日(月)(1泊2日)

本キャンプ 平成30年8月4日(土)～11日(土)(7泊8日)

#### (2) 参加者

①参加対象 小学校5、6年生 中学校1、2年生

②参加人数 21名(男子14名、女子7名)

(5年生5人、6年生13人、1年生2人、2年生1人)〈応募総数28名〉

③参加者の内訳 群馬県前橋市8名、桐生市3名、榛東村2名、高崎市1名、吉岡町1名、みどり市1名、みなかみ町1名、東京都町田市1名、埼玉県久喜市1名、千葉県柏市1名、栃木県栃木市1名

### 3. 企画運営のポイント

- ・登山をメインとしたプログラムで、長七郎山・黒檜山・駒ヶ岳・地蔵岳・鍋割山・榛名富士の6つの山を登り、赤城山から榛名山まで徒歩で移動する。(総距離約70km、標高差約3,000m)
- ・生活体験を重視し、自分のことは自分でやることを徹底する。
- ・毎晩振り返りシートで、テーマ「挑戦・協力・感謝」を意識させながら振り返りを行い、自分と向き合う時間を十分にとる。
- ・生活面においては、「あいさつ・食事・うんち」の3つのテーマで基本的な生活態度を養い、規則正しい生活を送れるようにする。
- ・ボランティアの事前研修(7/7-8)で、安全管理も含めた登山講義や実地踏査を実施する。

### 4. 日程

日程概要	プログラム	宿泊場所
7/15(日) 事前キャンプ1日目	アンケート、仲間作り(AAP)、 スプーン・フォーク作り	国立赤城青少年交流の家
7/16(月) 事前キャンプ2日目	テント設営研修、野外炊事研修	
8/4(土)1日目	開校式、仲間作り(アイスブレイク)、 テント設営、野外炊事、登山講義	国立赤城青少年交流の家
8/5(日)2日目	長七郎山(1,579m)登山	前橋市赤城少年自然の家
8/6(月)3日目	黒檜山(1,828m)・駒ヶ岳(1,685m)登山	前橋市赤城少年自然の家
8/7(火)4日目	これまでの振り返り、フォトフレーム作り、 1日3食完全自炊 ※地蔵岳日の出登山・洗濯は雨のため、中止。	前橋市赤城少年自然の家
8/8(水)5日目	自然の家～鍋割山(1,332m)登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/9(木)6日目	交流の家～榛東村創造の森キャンプ場(24km)	榛東村創造の森キャンプ場
8/10(金)7日目	榛東村創造の森キャンプ場～榛名富士(15km) 榛名富士(1,391m)登山～交流の家	国立赤城青少年交流の家
8/11(土)8日目	振り返り(アンケート)、閉校式	

## 5. 主な活動内容



仲間作り



長七郎山1579m



黒檜山1828m



駒ヶ岳1685m



これまでの振り返り



鍋割山1332m



榛東村創造の森キャンプ場



榛名富士1391m

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足20名(95%) やや満足1名(5%) やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・登山はつらくて大変でしたが、頂上に着いたときの景色がきれいで、足の痛みを忘れてしまいました。
- ・黒檜山を登った時に、岩がたくさんあって大変だったけど、山頂についた時にとても達成感があった。
- ・鍋割山の登山はきつかったけど、雲海を見ることができ、とてもよかった。
- ・友達と協力することの大切さを知ることができたので、これからの生活では、友達とたくさん協力して、もっと良い仲にしていきたいと思いました。
- ・規則正しい生活をすることで、生活習慣がもっとよくなると思いました。
- ・これからは何事にもあきらめない。
- ・限界突破キャンプに参加して、これから何でも新しいことに挑戦すること、仲間と協力すること、人に感謝することができる人になりたい。

### (3) アンケート調査結果

#### ① アンケート調査の概要

「限界突破キャンプ」の参加者21名を対象に、事前キャンプ1日目(Pre)、キャンプ最終日(Post)、キャンプ終了1ヶ月後(After)の計3回アンケート調査を行った。有効回答数は、全ての回答を得られた20名である。

質問項目の選定は企画委員会で検討し、平石(1990)が作成した「自己肯定意識尺度」のうち、対自己領域の一つ「自己実現的態度」の7項目と、岩瀧ら(2008)が作成した「中学生の教師への援助要請スキル尺度」から7項目の計14項目のアンケートを作成した。

事前、事後については、プログラムの中で質問紙に記入し、1ヶ月後は郵送にて調査を行った。

#### ② 「自己実現的態度」の考察

信州大学教育学部 講師 瀧 直也

表1は、3回の調査結果を分散分析により比較した結果である。多重比較の結果、「前向きに物事に取り組んでいる」において、PreからPostにかけて有意な向上傾向があった。

また、全ての項目においてPreからPostにかけて平均値は増加し、PostからAfterにかけては減少している傾向がみられる。特に図1に示す「2. 熱心に何かに取り組んでいる」「3. 前向きに物事に取り組んでいる」「5. やる気に満ちあふれている」の3項目は、PreからPostにかけて向上しており、これらは本キャンプがねらいとしていた「最後までやりぬくこと」を達成したことにより変化が現れていると推察できる。約70kmの距離を仲間と共に歩き通したことにより、達成感を味わい、自分に自信を持てたことにより、「熱心に」「前向きに」「やる気」といった

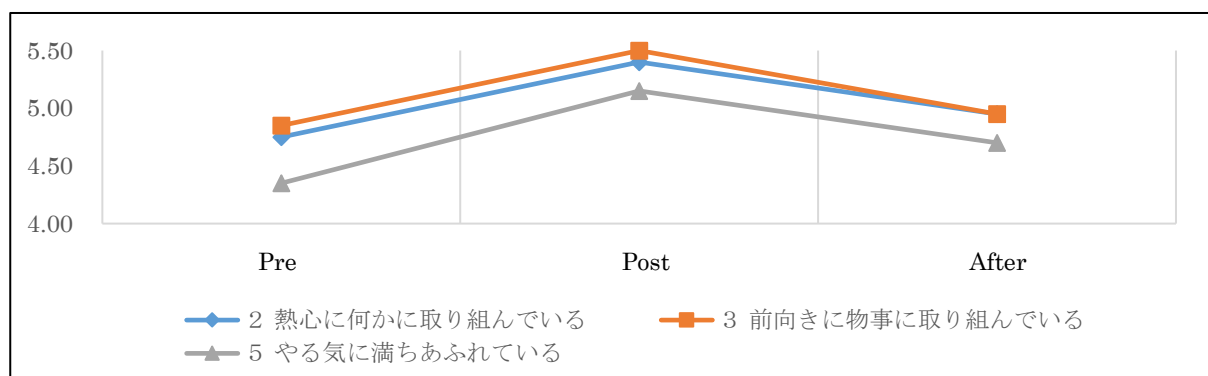
要素に影響をもたらしたことが考えられる。今後、この経験を日常生活につなげていくことで、自分の夢や目標に対しても積極的に関わっていくことが期待できる。

【表1 自己実現的態度の各項目の比較】

No.	質問項目	平均値 (標準偏差)						F値	多重比較
		Pre		Post		After			
1	自分の夢を叶えようと意欲に燃えている	4.55	(1.05)	4.85	(1.27)	4.75	(1.02)	0.37	
2	熱心に何かに取り組んでいる	4.75	(0.97)	5.40	(0.94)	4.95	(1.00)	2.36	
3	前向きに物事に取り組んでいる	4.85	(0.93)	5.50	(0.95)	4.95	(1.10)	2.88	事前<事後†
4	自分の良いところを一生懸命伸ばそうとしている	4.75	(0.97)	5.20	(0.95)	4.90	(1.21)	0.95	
5	やる気に満ちあふれている	4.35	(1.27)	5.15	(1.09)	4.70	(1.17)	2.31	
6	自分のやりたいことが何なのか分からない	4.95	(1.19)	5.20	(1.32)	4.80	(1.54)	0.44	
7	自分には目標というものがない	5.30	(1.26)	5.45	(1.15)	5.05	(1.57)	0.46	

† p<.10

【図1 自己実現的態度得点の変化】



### ③「援助要請スキル」の考察

群馬大学教育学部 准教授 岩瀧 大樹

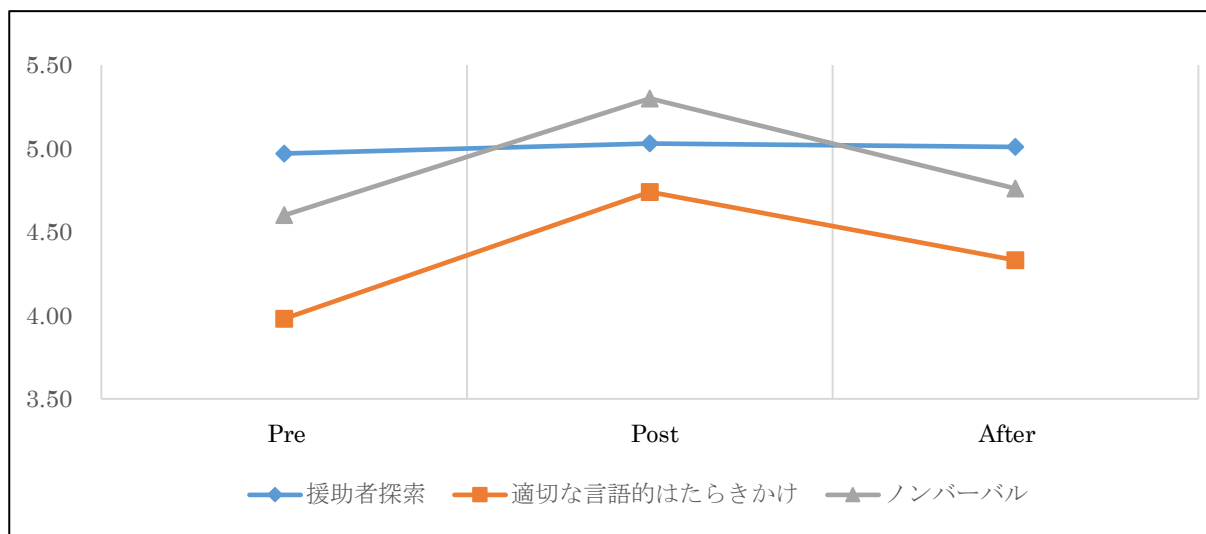
いくつかの項目で天井効果、フロア効果が確認されたが、これらに関しては先行研究にて既に十分な信頼性が示されていることから、使用に問題はないと判断した。

各因子については、上記も含め、全体的にキャンプスタートの時点から高い平均値が確認された。本尺度は特に生活適応との高い関連性が明らかにされている。そのため、今回のキャンプ参加者は、スタートの時点である程度以上の生活適応を保ち、適切に周囲に援助を求めたり、援助を活用したりすることが可能であった背景が推測される。

「援助者探索」に関しては、明らかな得点の差は確認されなかったが、一定の高い水準を維持していたといえる。「適切な言語的はたらきかけ」に関しては、キャンプ直後の Post で最も高く、Pre と After とは有意な差があることが示された。また、「ノンバーバル」に関しては、Pre と Post においてのみ、得点の差が確認された。(図2参照)

有意差の確認された両因子では Post での得点が最も高いことから、今回のキャンプのプロセスにおいて、参加者たちが適宜言語的、非言語的に他者に援助を求め、活用していた様子がうかがえる。しかし、After においては、共に Pre の段階に戻る傾向が示された。ここから、参加者はキャンプ中、共通した課題達成に向け、適宜コミュニケーションを図りつつ、協力や協働のできる関係を形成していたことが推察できる。そして、日常生活に戻ると、従来の状態に近づいていることが読み取れる。得点は下がっているが、参加者たちのもともとの援助要請スキル水準は高い。ゆえに、参加者はキャンプの実施中、日常生活より密なコミュニケーションを構築し、援助要請スキルを活用していた、と判断できるだろう。

【図2 援助要請スキル得点の変化】



#### (4) 成果

- ①「あいさつ・食事・うんち」の3つのテーマを掲げたことで、特にあいさつができるようになった。
- ②登山講義や登山中での実際の登山の仕方を指導することで、参加者が安全に登山をすることができた。
- ③毎日「挑戦」を意識しての振り返りを行うことで、総距離約70kmの行程を自分の足で移動することができた。
- ④仲間とテント設営や野外炊事などをして、寝食を共にすることで、協力することや感謝することなどを学ぶことができた。
- ⑤ボランティア事前研修では、1泊2日で担当職員とボランティアスタッフが現地を下見し、移動ルートを実際に歩いた。安全管理も含めた登山講義や実地踏査を実施することで、本番に備えた準備を入念にすることができた。

#### (5) 課題

- ①今年度のキャンプテーマ（挑戦・協力・感謝）のように来年度もテーマを設け、キャンプ後にはそれぞれのテーマに沿った参加者の成長や変容が見られるようなプログラムを立案する。
- ②次年度は詳細な雨天時プログラムを作成する。
- ③今夏の猛暑を考えると、熱中症など懸念事項が生じるおそれがあるため、次年度は公道を歩く行程について検討する必要がある。

担当 企画指導専門職 小倉 祐司

## 「チャンス フォー オール チルドレン 宿泊キャンプ in 赤城」

### 1. 趣旨

国立青少年教育振興機構の各施設において、経済的に困窮した家庭の子供を対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。親子のふれあいや児童養護施設子ども達と大学生ボランティアの交流を深め、自然体験や食育、工作体験などを行うことにより、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期日

第1回 平成30年 8月24日(金)～ 8月25日(土)

第2回 平成30年10月13日(土)～10月14日(日)

#### (2) 参加者

##### ①参加対象

第1回 母子家庭等ひとり親家庭の親子

第2回 児童養護施設希望館八幡の家

##### ②参加人数

第1回 65名(男子22名、女子43名)

第2回 10名(男子4名、女子6名)

##### ③参加者の内訳

第1回 母子家庭27家族 父子家庭1家族

第2回 小学1年生3名、小学2年生1名、小学5年生1名、小学6年生2名  
引率者3名

### 3. 企画運営のポイント

- ・ひとり親家庭の親子や児童養護施設子どもを対象に、日常生活ではあまりしないような体験活動を中心にプログラムを構成する。
- ・はじめに参加者同士やスタッフとの交流を図るためにアイスブレイクを十分に行う。
- ・第1回1日目では、野外でのドラム缶ピザ作りに取り組み、生地作りから焼き上げるところまで全て体験できるようにする。また、夜は親子の絆を深めるために、「子ども体験遊びリンピック」を兼ねた親子でチャレンジゲームを開催する。
- ・第1回2日目では、親子での体験活動として、赤城山の大沼でのカッター体験(ボート漕ぎ)を行う。
- ・第2回1日目では、児童養護施設子ども達がやってみたいと思うことを確認し、これまでに行っていない体験活動を中心にプログラムを構成する。また、入浴時は、大学生ボランティアと一緒に入ることによって、参加者とボランティアスタッフとの絆を深められるようにする。
- ・第2回2日目では、うどん打ち体験を行い、粉からうどんを作る作業を自らの手で実際に行うことにより、その大変さや食事のできる事の大切さを感じられるようにする。
- ・第1回、第2回ともに、キャンプの最後には、2日間の思い出をスライドショーで振り返る。

#### 4. 日程

##### 第1回

	午 前	午 後	夜
8月24日 (金)	受付 開会式 オリエンテーション アイスブレイク	昼食 ドラム缶ピザ&ポトフ 作り	親子チャレンジゲーム 学習タイム (子) 情報交換会 (親)
8月25日 (土)	カッター体験 (大沼)	昼食 (お弁当) フォトフレーム作り 閉会式 (スライドショー)	

##### 第2回

	午 前	午 後	夜
10月13日 (土)	受付 はじまりの会 オリエンテーション アイスブレイク	昼食 ドラム缶ピザ&ポトフ 作り	※夜の活動はなし
10月14日 (日)	うどん打ち体験	おわりの会 (スライドショー)	

#### 5. 主な活動内容

##### 第1回

「アイスブレイク」

「ピザ生地作り」

「食事タイム」

「親子チャレンジゲーム」

「焼きマシュマロ」

「カッター体験」



「アイスブレイク」

「かなな箸作り」

「うどん打ち体験」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

第1回 満足48名(74%) やや満足15名(23%) やや不満2名(3%) 不満0名

第2回 満足9名(90%) やや満足1名(10%) やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- 第1回
- ・普段家庭ではできないような体験(母親だけだと体験させてあげられないようなこと)をたくさんできてよかった。
  - ・元気いっぱい遊べるプログラムが多くてありがたかった。
  - ・子供同士、親同士が仲良くできたことがキャンプの醍醐味だと思う。
- 第2回
- ・子供たちが施設で生活しているときには見せないような真剣な表情で、ものづくりや調理をしている姿を見ることができた。
  - ・学生ボランティアと子供たちが非常に楽しく遊ぶ様子が見られてとてもよかった。
  - ・空いている時間に、手遊びなどのプログラムがあるとよかった。
  - ・ピザ作りやうどん打ちなど、いろいろな体験ができてよかった。

### (3) 成果

- 第1回
- ・親子で同じ部屋に宿泊し、協力していくつものプログラムを体験することで、親子の絆を少しでも深めることができた。
  - ・友達やスタッフとの関わりの中で、人とのつながりの大切さに気付くことができた。
- 第2回
- ・子供たちが新しいことに挑戦することの楽しさを知ることができた。また、いろいろなものを自分の力で作ることを通して、ものづくりの楽しさも知ることができた。
  - ・いろいろなことに挑戦することで、子供たちの「もっとやりたい」という気持ちを引き出すことができた。

### (4) 課題

- 第1回
- ・活動内容が多く入っていたため、時間的なゆとりが少なかったという意見があり、満足度も少し低かったので、今後は余裕のあるプログラムになるよう企画していきたい。
  - ・できるだけ多くの参加者に満足してもらえよう、事前にスタッフでプログラムの内容を十分に検討していく。
- 第2回
- ・今回は児童養護施設で生活している小学生のみの参加であった。中学生や高校生も一緒に生活しているのだが、学校の部活動やアルバイト等があったため参加できなかったため、次回は中学生や高校生の予定を考慮して、日程やプログラムを調整していきたい。

担当：企画指導専門職 梁河 昌彦

## 地域力向上事業〈生活・自立支援事業〉

### 「チャンス フォー オール チルドレン 日帰りキャンプ in 赤城」

#### 1. 趣旨

国立青少年教育振興機構の各施設において、経済的に困窮した家庭の子供を対象に、自然体験等の活動を通じた「生活・自立」を支援する取組を行い、子供たちの基本的な生活習慣の確立や自立する力を身につけることを目指す。親子の交流を深め、自然体験や食育、工作体験などを行うことにより、心身の健康増進や子供の健全育成を図る。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期日

第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回
平成30年 9月22日 (土)	平成30年 10月8日 (月)	平成30年 11月4日 (日)	平成30年 11月17日 (土)	平成30年 12月16日 (日)	平成31年 2月16日 (土)

##### (2) 参加者

- ①参加対象 母子家庭等ひとり親家庭の親子
- ②参加人数・内訳

第1回	5家族 12人 (母親 5人 子ども 7人)
第2回	8家族 18人 (母親 8人 子ども10人)
第3回	12家族 28人 (母親11人 父親 1人 子ども16人)
第4回	5家族 13人 (母親 5人 子ども 8人)
第5回	9家族 20人 (母親 8人 父親 1人 子ども11人)
第6回	5家族 11人 (母親 5人 子ども 6人)

#### 3. 企画運営のポイント

- ・ひとり親家庭の親子を対象に森遊びやクラフト、野外炊事、ニュースポーツ体験等を親子で行えるようプログラムを構成し、普段体験できないような活動ができるようにする。
- ・親子で様々な活動を行うことを通して、親子の絆を少しでも深められるようにする。

#### 4. 日程

第1回	第2回
9:00 受付	9:00 受付
9:30 はじまりの会 アイスブレイク	9:30 はじまりの会 アイスブレイク
10:00 森遊び	10:00 ネーチャーゲーム
12:00 昼食(食堂)	11:00 ドラム缶ピザ作り
13:00 学習タイム	15:00 学習タイム
14:00 スーパー竹とんぼ作り	16:00 おわりの会
16:00 おわりの会	

第3回	第4回
9:30 受付 10:00 イベント開始 (赤城フェスタ2018) 15:00 イベント終了(解散)	9:00 受付 9:30 はじまりの会 アイスブレイク 10:00 ネーチャーゲーム 11:00 学習タイム 12:00 昼食(食堂) 13:00 焼き芋作り 15:00 おわりの会
第5回	第6回
9:00 受付 9:30 はじまりの会 アイスブレイク 10:00 ネーチャーゲーム 10:30 棒巻きパン作り 13:00 キンボール体験 14:00 学習タイム 15:00 おわりの会	9:00 受付 9:30 はじまりの会 アイスブレイク 10:00 森遊び 10:30 学習タイム(英語) 11:00 フォトフレーム作り 12:00 昼食(食堂) 13:00 クップ体験 15:00 おわりの会

5. 主な活動内容

第1回「竹とんぼ作り」

第2回「ドラム缶ピザ作り」

第3回「赤城フェスタ2018」

第4回「焼き芋作り」

第5回「棒巻きパン作り」

第6回「フォトフレーム作り」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

第1回	満足12名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名
第2回	満足18名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名
第3回	※赤城フェスタ2018自由参加のためアンケートなし			
第4回	満足13名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名
第5回	満足20名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名
第6回	満足11名(100%)	やや満足0名	やや不満0名	不満0名

### (2) 参加者の声

- 第1回 ・初めて竹とんぼを作ってみて、上手にできてよかった。とても高く飛んだ。
- 第2回 ・ピザを粉から作る体験ができてよかった。ぜひ家でも親子でやってみたい。
- 第3回 ※赤城フェスタ2018に自由参加のためアンケートはとれなかったが、話をした家族はとても楽しく良い体験ができたと言っていた。
- 第4回 ・普段自分で焼き芋など作らないので、とても楽しく良い体験ができた。
- 第5回 ・手軽にパンの生地を作ることができ、炭で焼くととてもおいしく焼けることが分かり、とても良い体験ができた。
- 第6回 ・手軽に森遊びで拾った木の実を使ってフォトフレームができ、親子の思い出の写真を入れることができるのでとてもうれしい。また、自分の名前を色々な字体の英語で書けるようになってうれしかった。

### (3) 成果

- 第1回 ・消極的な子が打ち解けてきて、少しずつ積極的に活動に参加できるようになった。
- 第2回 ・普段やらないことを親子で行うことで、親子の絆を少し深められた。
- 第3回 ・今回は赤城フェスタ2018に参加したので、多くの家族にたくさんの体験活動を提供することができた。
- 第4回 ・大学生のボラと子供たちが仲良く楽しく交流できた。
- 第5回 ・キンボール(レク)を親子で一緒に行うことで、親子で楽しめる時間ができた。
- 第6回 ・クッブ(ニュースポーツ)を親子で一緒に行うことで、親子で楽しめる時間ができた。

### (4) 課題

- 第1回 ・今回は近隣の運動会が重なっていて参加者が少なくなりました。事前に日程等を確認し、多くの家族が参加できるように調整していきたい。
- 第2回 ・今回は8家族の参加者であったため、ピザ作りの手順等がしっかりと伝わらないところがあった。きめ細かい説明ができるようにしていきたい。
- 第3回 ・赤城フェスタ2018に自由参加だったため、それぞれの家族の動きが把握できなかった。ある程度は団体として動くことも検討していきたい。
- 第4回 ・今回は3家族のキャンセルがあった。子供の発熱の理由が多かったが、風邪等がはやる時期なので、参加した子どもたちの予防もしっかりとしていきたい。
- 第5回 ・持ち物の連絡に不備があったので、次回はしっかりと連絡をしていきたい。
- 第6回 ・今後はもっと多くの家族が参加できるよう、広報に力を入れていきたい。

第1・6回 担当：企画指導専門職 小倉 祐司  
第2～5回 担当：企画指導専門職 梁河 昌彦

## 幼児期の体験活動・読書活動普及啓発事業

### 「親子キャンプ」

～あかぎであそぼう！！～

#### 1. 趣旨

幼児の発達段階に応じて、「36の基本的な動き」を取り入れた運動を行い、成長を促す。保護者対象のプログラムでは、36の基本的な動きについて説明し、その重要性について理解を図る。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期日

平成30年10月20日（土）～21日（日）

##### (2) 参加者

- ①参加対象 幼児（年中、年長を含む）とその保護者
- ②参加人数 33名（10家族）（応募総数36名）
- ③参加者の内訳 群馬県前橋市10名、高崎市9名、伊勢崎市4名、館林市2名、埼玉県滑川町3名、長野県長野市5名

#### 3. 企画運営のポイント

- ・「36の動きを取り入れた運動遊び」では、興味・関心をもって、繰り返し遊べるよう、段ボールで作成した場や遊具を用いた8つの場を用意する。
- ・「遊びリンピック」では、4種目を親子で競い合い、各種目3位までにはメダルと賞状をプレゼントする。
- ・「読み聞かせ体験会」では、講師による親子一斉と親だけの読み聞かせを行うとともに、学生ボランティアによる幼児への読み聞かせを行う。
- ・「長七郎山登山」では、親子で一緒に自然を感じながら登る。

#### 4. 日程

	午前	午後	夜
10月20日 (土)		はじまりの会 36の動きを取り入れた運動遊び体験 遊びリンピック	「絵本の読み聞かせ体験会」 講師：前橋市読み聞かせグループ 連絡協議会（田子智代、馬場由佳里、高橋陽子、青柳聡） 講義「幼児期に身体を使って遊ぶ」 講師：国立赤城青少年交流の家 所長 松村純子
10月21日 (日)	遊びリンピック表彰式 長七郎山登山	終わりの会	

## 5. 主な活動内容



「一本橋を渡ろう」



「トンネルくぐり」



「おやつをプレゼント」



「空き缶積み」



「絵本の読み聞かせ」



「長七郎山登山」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足8名(80%) やや満足2名(20%) やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・普段やらない動きで、全身の動きが良くなった感じがした。
- ・子供が意欲的に、やりたい遊びやルールを守って遊び、順番を決めて納得しながらできたことが大きな成果だと思う。
- ・親向けの読み聞かせの時間があるのがよかった。
- ・山登り自体が初めてだったが、自然に触れたり、難しいことに挑戦したりすることで自信もついたと思う。
- ・プログラムの項目がとても面白いものばかりで、また参加したい。ボランティアがいたおかげで、子供2人でも無理なく参加できて本当に助かった。

### (3) 成果

- ①「36の動きを取り入れた運動遊び」「遊びリンピック」ともに、子供達の運動量や親子で取り組む様子から見て、プログラムの内容は良かった。
- ②「読み聞かせ体験会」は、パネルシアターや絵本の内容が良かった。また、親子で分かれて活動を行ったのは良かった。
- ③「長七郎山登山」は、登る距離や高低差から考えても、幼児にとって丁度良かった。

### (4) 課題

- ①幼児はキャンセルがあるため、もう少し足で稼ぐ広報をして、参加者を増やすようにする。
- ②幼児の動きの想定をする。(登山・食事・入浴時間にゆとりを持たせる。)
- ③食事の際に使う幼児用のイスやおむつ替え室、授乳室、昼寝室など、幼児用の設備・準備の充実を図る。

担当 企画指導専門職 田村 文明

## 幼児期の体験活動・読書活動普及啓発事業〈民間企業等連携事業〉

### 「育パパ&育ママ応援ファミリーキャンプ」

#### 1. 趣旨

当機構は、体験活動を通じた青少年の自立を目指し、幼児期からの体験活動や基本的な生活習慣の育成について推進するとともに体験の場と機会のさらなる充実について取り組んでいるところである。本事業は、その具体的な事業の一つとして、民間企業等との連携による教育事業等の質的・量的な拡充を図るため、民間企業との共催事業を実施し、民間企業と連携したモデルを構築する。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期日

平成30年11月23日(金)～24日(土)

##### (2) 参加者

- ①参加対象 幼児(3歳以上)を含む家族・親子
- ②参加人数 59名(19家族) (応募総数61名)
- ③参加者の内訳 東京都13家族、埼玉県4家族、千葉県2家族

#### 3. 企画運営のポイント

- ・子供が泣いても気をつかわずに電車に乗りたい親子、自然の中で思いっきり子供を遊ばせたい親子等、そんな親子の思いを形にした三者連携事業とする。
- ・「わくわく親子運動あそび」では、興味・関心を持って、繰り返し遊べるよう、段ボールで作成した場や遊具を用いた8つの場を用意する。
- ・「育パパ育ママ講座」では、国立青少年教育振興機構理事長 医学博士の鈴木みゆき氏をお招きし、演題「子供が賢く元気に育つには」のお話を保護者向けにする。
- ・「絵本の読み聞かせ」では、学生ボランティアによるパジャマへの着替えや歯磨き指導の後、幼児への読み聞かせを行う。
- ・「フォトフレーム作り」では、ぐんまの森の木の実を使って、親子で楽しみながら自由に世界に一つだけの作品を作る。

#### 4. 日程

	午前	午後	夜
11月23日 (金)	浅草駅発-(特急りょうもう号) 赤城駅着	はじまりの会 わくわく親子運動あそび ぐんまちゃんと全員集合写真 ミニキャンドルファイヤー (オプション)	育パパ育ママ講座 講座「子供が賢く元気に育つには」 講師：国立青少年教育振興機構 理事長 鈴木みゆき 絵本の読み聞かせ
11月24日 (土)	フォトフレーム作り テント体験(オプション) たき火体験(オプション) 終わりの会	赤城駅発-(特急りょうもう号) 浅草駅着	

## 5. 主な活動内容



「トンネルくぐり」



「フラフープけんけんば」



「ミニキャンドルファイヤー」



「育パパ育ママ講座」



「絵本の読み聞かせ」



「フォトフレーム作り」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足17名(89%) やや満足2名(11%) やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・子供がまた一つ成長したのを実感しました。機会をみてまた参加させていただきたいです。
- ・テント泊にもチャレンジさせたいです。
- ・普段、体験することのないことをまとめて行えて、密度の高い1日を過ごせて、有意義でした。
- ・幼児向けの企画として、とても楽しかった。

### (3) 成果

- ①キャンプに参加しようと思ったきっかけで一番多かったのは、「プログラムに魅力を感じたから」であることから、プログラムの内容は良かった。
- ②「わくわく親子運動あそび」では、子供達の運動量や親子で取り組む様子から見て、興味・関心を持って、繰り返し遊べる場となった。
- ③学生ボランティアが、絵本の読み聞かせや子供の面倒など、細かい点に気を配って動いてくれたことで、参加者から感謝のお言葉をたくさんいただいた。

### (4) 課題

- ①三者連携事業ということで、役割分担を明確にし、連絡調整を密に行う。
- ②幼児向けのタイムスケジュールにする。(主に食事～入浴～講座時間)

担当 企画指導専門職 田村 文明



## 幼児期の体験活動・読書活動普及啓発事業

### 「『育つ力・はぐくむ力』をめざして」

#### 1. 趣旨

幼児教育指導者等を対象に、三法令改訂（定）後の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を育む保育実践と幼児期の「体験活動」の重要性について理解する。また、幼児の運動プログラムの体験会を通して、健康な心と体を育てる指導方法を身につける。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期日

平成31年1月11日（金）～12日（土）

##### (2) 参加者

①参加対象 幼稚園教諭・保育士・保育教諭・小学校教諭等

②参加人数 <宿泊>40名<日帰り>58名<合計>98名（応募総数106名）

③参加者の内訳 群馬県9名、埼玉県2名、栃木県2名、神奈川県1名、  
長野県1名

<宿泊>男6名、女34名、幼稚園教諭12名、保育士26名、その他2名

<日帰り>男13名、女45名、幼稚園教諭17名、保育士14名、その他27名

#### 3. 企画運営のポイント

- ・「36の基本的な動きを取り入れた幼児の運動プログラム体験会」では、興味・関心をもって、繰り返し遊べるよう、段ボールで作成した場や遊具を用いた9つの場を用意する。
- ・「段ボール作り」では、自分の職場へ持ち帰って活用できるよう、実践的な作品作りを行う。
- ・「くつろぎカフェ」では、他県や他園の先生方との親睦を深める。
- ・「シンポジウム」では、三法令改訂（定）後の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を育む保育実践と幼児期の「体験活動」の重要性について、事前質問や当日質問を取り入れながら学ぶ。

#### 4. 講師

- |                       |         |
|-----------------------|---------|
| ・文部科学省幼児教育課長          | 先崎 卓歩 氏 |
| ・内閣府子ども・子育て本部認定こども園担当 | 澤峰 紀子 氏 |
| ・前橋市教育長               | 塩崎 政江 氏 |
| ・国立青少年教育振興機構理事長       | 鈴木みゆき 氏 |

#### 5. 日程

	午 前	午 後	夜
1月11日 （金）		開講式	36の基本的な動きを取り入れた 幼児の運動プログラム体験会 A) みんなで遊んじゃおう！ B) 段ボールで作っちゃおう！ くつろぎカフェ
1月12日 （土）	シンポジウム「育つ力・はぐく む力」をめざして 開講式	利用相談会（オプション） ①3月卒園プログラム ②4月～6月遠足プログラム	

## 6. 主な活動内容



「ホップステップジャンプ」



「ワニの川わたり」



「段ボール作り」



「くつろぎカフェ」



「シンポジスト」



「シンポジウム」

## 7. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 87名 (89%)      やや満足 11名 (11%)      やや不満 0名      不満 0名

### (2) 参加者の声

- ・すごく雰囲気の良い中で体験活動を通しての学びや、シンポジウムを通して保育の見直し等を行っていかなくてはならないと感じました。
- ・実習では、遊ぶ楽しさや体を動かすことの気持ちよさを感じました。
- ・シンポジウムでは、幼保小の連携の大切さや、遊びの中で学ぶことの多さを改めて知ることができました。
- ・他園の先生方との関わりや情報交換できる場があり、とても勉強になりました。
- ・園児達を連れてきてあげたいと思いました。

### (3) 成果

- ①フォーラムに参加しようと思ったきっかけが一番多かったのは、「プログラムに魅力を感じたから」であることから、プログラムの内容は良かった。
- ②「36の基本的な動き」を取り入れた幼児の運動プログラム体験会では、子供達の目線になって全力で遊ぶ体験をしたからこそ、新たな気づきが生まれ、実践に活かせるきっかけとなった。
- ③「シンポジウム」では、三法令改訂（定）後の話や幼保小連携の大切さ等について学ぶことができ、これからの教育保育に活かせる機会となった。

### (4) 課題

- ①地域の幼稚園・保育園等に「遊んで身に付く36の基本的な動きを取り入れた幼児の運動プログラム」を普及していく。
- ②今後、近隣市の各園における「運動プログラム」の実践事例を積み重ねていく。

担当 企画指導専門職 田村 文明

## 普及啓発事業

# 「小学生ラグビー交流会」

### 1. 趣旨

国立赤城青少年交流の家において、青少年の健全育成を図ることを目的とし、スポーツ交流会を開催することとする。

- スポーツを通して心身ともに健康な子どもを育成する。
- 地元団体と群馬県内外の小学生が互いに親睦を図り、生涯スポーツの基礎づくりに寄与する。
- 今後の競技技術とスポーツ精神を養う。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期日

平成31年3月16日(土)～17日(日)

#### (2) 参加者

- ①参加対象 群馬県内外の小学生ラグビースクール(男子・女子)
- ②参加人数 178名(小学生137名、指導者41名)
- ③参加者の内訳 群馬県内5チーム(前橋RS、渋川RS、桐生ジュニアRS、館林RS、東毛ワイルドナイツRS)  
埼玉県内2チーム(久喜RS、ケヤキッズ大宮ラグビーフットボールクラブ)

### 3. 企画運営のポイント

- ・4～6年生については、ラグビークリニックとAAP(あかぎアドベンチャープログラム)を実施し、ラグビースキルやチームワーク等の向上を図る。
- ・1～3年生については、親しみやすいタグラグビーを通して、他チームとの交流を図る。
- ・2日目のラグビークリニックについては、ゲスト講師として、パナソニックワイルドナイツの現役選手や元日本代表の選手達に指導していただき、基本スキルの向上を図る。

### 4. 日程

	午 前	午 後	夜
3月16日 (土)	開会式 ラグビークリニック(4～6年) 講師 NPO法人ワイルドナイツ スポーツプロモーション 三宅 敬 氏 田仲 一正 氏 大塚 貴之 氏 AAP(4～6年) タグラグビー(1～3年)	ラグビークリニック(4～6年) 講師 NPO法人ワイルドナイツ スポーツプロモーション 三宅 敬 氏 田仲 一正 氏 大塚 貴之 氏 AAP(4～6年) タグラグビー(1～3年) 屋根付き広場にてバーベキュー	講演会 講師 NPO法人ワイルドナイツ スポーツプロモーション 大塚 貴之 氏
3月17日 (日)	ラグビークリニック 講師 NPO法人ワイルドナイツ スポーツプロモーション 三宅 敬 氏 田仲 一正 氏 大塚 貴之 氏	閉会式	

## 5. 主な活動内容



「A.A.P」



「野外炊事」



「講演会」



「ラグビークリニック」



「タグラグビー」



「全員集合」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果（チーム単位）

満足6名（86%） やや満足1名（14%） やや不満0名 不満0名

### (2) 参加者の声

- ・他のチームと一緒にラグビーをすることができて良かったです。
- ・いつもとは違う練習メニューで、コーチングも勉強になりました。
- ・A.A.P.では、チームワークの大切さを感じました。
- ・コミュニケーションの取り方に関して、貴重なお話が聞けました。
- ・基本スキルを楽しく指導していただきありがとうございました。

### (3) 成果

- ①交流会に参加しようと思ったきっかけで一番多かったのは、「プログラムに魅力を感じたから」であることから、プログラムの内容は良かった。
- ②「ラグビークリニック」では、身に付けたいねらいが明確で、子ども達にとって基本スキルの向上を図ることができる良い機会となった。
- ③「講演会」では、大塚貴之氏（先天性感音性難聴）から、『聞く』ではなく、『聴く（表情、仕草、気持ちを考える）』を大切にするなど、コミュニケーションの取り方について学ぶことができた。

### (4) 課題

- ・寒さ対策等、開催時期を検討する必要がある。

担当 企画指導専門職 田村 文明

## 「ボランティア養成セミナー」

～赤城からひらく、新しい扉～

### 1. 趣旨

参加者に、青少年教育施設のボランティアに関する理論と活動に必要な知識や技術を身につけさせる。また、先輩や同年代といったボランティア同士の縦と横のつながりを深めて、意欲や継続力を高める。

これをきっかけに積極的にボランティア活動に参加することで、社会性や自立心を育み、広く社会において活躍できる人材を育成する。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期日

第1回：平成30年6月 2日（土）～6月 3日（日）※群大教育学部と連携して実施

第2回：平成30年6月16日（土）～6月17日（日）

#### (2) 参加者

##### ①参加対象

第1回：群馬大学教育学部生（講義「NC&CSL」受講生のうち、参加希望者）

第2回：高校生・学生・社会人等でボランティア活動に興味・関心のある人

##### ②参加人数

第1回：140名（男性64名 女性76名）

第2回： 24名（男性11名 女性13名）

##### ③登録者数

第1回：140名 第2回：23名

### 3. 企画運営のポイント

第1回・群馬大学教育学部岩瀧研究室と連携し、群馬大学生が赤城で自ら体験活動を行いながら、赤城フェスタへ向けたスキルアップを図れるようにする。

・法人ボランティアに対する知識を深め、法人ボランティア登録を促す。

第2回・国立青少年教育施設における法人ボランティアについて理解を深める。

・赤城のプログラムや宿泊を体験することにより、事業補助でボランティアを行う際のスキルアップを図れるようにする。

### 4. 日程

#### 第1回

	午前	午後	夜
6月2日 (土)	<青少年施設の現状と理解> 講師 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子 救急救命法 講師 前橋市北消防署 白川分署職員	<青少年教育> 講師 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子 ボランティア活動の意義 講師 国立赤城青少年交流の家 職員	<ピアサポート・グループワーク> 講師 群馬大学教育学部 准教授 岩瀧 大樹
6月3日 (日)	<青少年施設におけるボランティア活動> 講師 国立赤城青少年交流の家 職員 野外炊事 舞ギリ、火打ち石による火起こし 空き缶ご飯、カレー作り	<野外炊事> 舞ギリ、火打ち石による火起こし 空き缶ご飯、カレー作り	

## 第2回

	午 前	午 後	夜
6月16日 (土)	<青少年教育> 講師 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子 青少年施設の現状と理解 講師 国立赤城青少年交流の家 所長 松村 純子	<野外炊事> ドラム缶ピザ	<ボランティア活動の意義> 講師 国立赤城青少年交流の家 職員 先輩ボランティア
6月17日 (日)	<救急救命法> 講師 前橋市北消防署 白川分署職員	<青少年施設におけるボランティア活動> 講師 国立赤城青少年交流の家 職員	

### 5. 主な活動内容



救急救命法



舞ギリによる火起こし



空き缶ご飯



青少年教育



ドラム缶ピザ



先輩ボランティアの話

### 6. 成果と課題

#### (1) 参加者アンケート結果

第1回 満足113名(81%) やや満足27名(19%) やや不満0名 不満0名  
 第2回 満足22名(92%) やや満足2名(8%) やや不満0名 不満0名

#### (2) 参加者の声

- ・主体性、責任性、協調性、それぞれ学ぶことができ、異年齢交流を通してボランティアの意義について学べて良かったです。ボランティア活動に対する見方が少し変わり、前向きにこれから参加してみたいと思うことができたセミナーでした。
- ・とても楽しく、知らなかった人とも仲良くなるようなプログラムで、この事業に参加できて本当に良かったと思えました。

#### (3) 成果

- ①参加者同士がお互いに関わり合いながら、ボランティア活動の意義について考え、ボランティアを行う上での基礎となる考え方やスキルを身につける機会を提供することができた。
- ②野外炊事は2回とも、参加者に対してやや負荷をかけるプログラムであったが、それ故に、心に残る体験となった。

#### (4) 課題

- ①ボランティア養成セミナーの参加者を、次の事業の参加へと繋げていくために、ボランティア同士やボランティアと職員とのつながりを作っていくことが課題である。

担当：企画指導専門職 田村 佳之

## 青少年教育指導者等の養成・研修事業

### 「自然体験活動指導者養成研修会（NEALリーダー）」

#### 1. 趣旨

小学校新学習指導要領に、自然体験活動を中心とする長期集団宿泊活動が推奨されたことを受け、自然体験活動指導者養成研修を実施し、特定の活動プログラムの指導に当たる指導者並び、自然体験活動の普及や振興に貢献できる指導者を養成する。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期日

平成30年9月7日（金）～9月9日（日）

##### (2) 参加者

- ①参加対象 自然体験活動に関心のある方
- ②参加人数 38名（男子6名、女子32名）
- ③参加者の内訳 青少年教育施設4名、国立施設職員3名、大学生30名、会社員他1名

#### 3. 企画運営のポイント

- ・ボランティアセミナー受講者は、2泊目から研修会に参加できるようにカリキュラムを構成する。
- ・NEALを取得していない職員を受講させながら運営スタッフとして対応する。

#### 4. 日程

	午 前	午 後	夜
9月7日（金）		ガイダンス 講義「青少年教育における体験活動」 講師 国立赤城青少年交流の家所長 松村 純子 氏	講義・演習 「自然体験活動の安全管理」 講師 順天堂大学スポーツ 健康科学部助教 中丸 信吾 氏
9月8日（土）	講義・実技 「自然体験活動の技術」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 梁河 昌彦 氏	講義・実技「自然体験活動の技術」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 梁河 昌彦 氏 講義「対象者理解」 講師 国立赤城青少年交流の家所長 松村 純子 氏	講義・実技 「自然体験活動の指導」 講師 大東文化大学教授 中村 正雄 氏
9月9日（日）	講義・実技 「自然体験活動の特質」 講師 公益財団法人キープ協会 環境教育事業部事業部長 鳥屋尾 健 氏	履修認定試験	

## 5. 主な活動内容



「青少年教育における体験活動」



「自然体験活動の安全管理」



「自然体験活動の技術①」



「自然体験活動の技術②」



「自然体験活動の指導」



「自然体験活動の特質」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 30名 (79%)      やや満足 8名 (21%)      やや不満 0名      不満 0名

### (2) 参加者の声

- ・自然体験活動の意義、環境教育について知ることができた。
- ・リスクマネジメントについて知ることができた。
- ・年齢、状況に応じた青少年への対応を学べた。

### (3) 成果

- ① 9月上旬に開催することで学生をターゲットにした結果、募集定員20名のところ38名の参加者となった。
- ② 38名全員がNEALリーダーに合格し、ひとは演習を終了し、インストラクターを受講した。
- ③ 当所では初めての講師を2名招聘することができた。

### (4) 課題

- ① 大学生30名のうち29名が十文字学園大学であった。複数の大学からの参加者を集められるようにする。
- ② 2泊3日の場合は、平日も絡むため、受講が難しい参加者もいるため、次年度は2泊3日の行程を1泊2日の行程に分割し5月と6月の土日に実施し、受講しやすくする。

担当 事業推進係長 丸山 峰樹



## 「教員免許状更新講習（選択領域 18 時間）」

～学級経営に活かす豊かな体験活動～

### 1. 趣旨

様々な立場の講師からの講義を通して、学習指導要領改訂を踏まえた、最新の教育動向を学びながら、体験活動の重要性を理解するとともに、本所で行われている体験活動プログラムを実際に体験する実習を通して、体験活動の必要性や有用性を実感するとともに、教員としての資質向上を図る。

### 2. 事業の概要

(1) 期日 (第1・3回: 国立赤城青少年交流の家、第2回: 埼玉県立大滝げんきプラザ)

第1回 平成30年 7月26日(木)～ 7月28日(土)

第2回 平成30年 8月20日(月)～ 8月22日(水)

第3回 平成30年11月23日(金)～11月24日(土)

(2) 参加者

①参加対象 小・中学校、高等学校の教員

②参加人数

第1回 39名(男子15名、女子24名)

第2回 29名(男子8名、女子21名)

第3回 30名(男子21名、女子9名)

③参加者の内訳

第1回 小学校25名 中学校8名 特別支援学校3名 その他3名  
群馬県17名 栃木県13名 東京都4名 埼玉県3名 茨城県1名  
福島県1名

第2回 小学校18名 中学校8名 特別支援学校2名 その他1名  
埼玉県16名 群馬県7名 東京都3名 神奈川県2名 栃木県1名

第3回 小学校19名 中学校10名 高等学校1名  
群馬県19名 栃木県10名 埼玉県1名

### 3. 企画運営のポイント

- ・「仲間づくりのプログラム」として、エレメントを使わずに、学級開きや集会、体育の授業で行えるあかぎアドベンチャープログラムを行う。
- ・参加した教員が自信をもって宿泊体験学習を引率できるように、より実践的な活動を行う。
- ・身近な自然を活かした活動を行うことで、それぞれの学校でも自然に親しみがもてる活動を行えるようにする。

### 4. 日程

#### 第1回

	午前	午後	夜
7月26日 (木)	講義「学校教育の現状と体験活動」 講師 元前橋市教育委員会参事 小崎 昭一 氏	講義・実習「仲間づくりのレクリエーション①」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 梁河 昌彦 氏	情報交換会

7月27日 (金)	講義・実習「仲間づくりのレクリエーション②」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 梁河 昌彦 氏	実習「あかぎの自然体験プログラム」 講義「自然体験活動と子どもの変容」 講師 公益財団法人キープ協会 環境教育事業部主席研究員 増田 直広 氏	講義・実習「野外炊事」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 田村 文明 氏
7月28日 (土)	講義「学校教育における体験活動の意義」 講師 聖心女子大学非常勤講師 小林 道正 氏 実習「クラフト」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 田村 文明 氏	履修認定試験	

## 第2回

	午前	午後	夜
8月20日 (月)	講義「学校教育の現状と体験活動」 講師 埼玉県立大滝げんきプラザ所長 石間戸久幸 氏	講義・実習「仲間づくりのレクリエーション①」 講師 国立赤城青少年交流の家 主任企画指導専門職 田村 佳之 氏	情報交換会
8月21日 (火)	講義・実習「仲間づくりのレクリエーション②」 講師 国立赤城青少年交流の家主 任企画指導専門職 田村 佳之 氏	実習「大滝自然体験プログラム」 講義「自然体験活動と子どもの変容」 講師 公益財団法人キープ協会 環境教育事業部主席研究員 増田 直広 氏	講義・実習「野外炊事」 講師 大滝げんきプラザ担当課長 板橋 英生 氏
8月22日 (水)	講義「学校教育における体験活動の意義」 講師 聖心女子大学非常勤講師 小林 道正 氏 実習「クラフト」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山 直樹 氏	履修認定試験	

## 第3回

	午前	午後	夜
11月23日 (金)	講義「学校教育の現状と体験活動」 講師 元前橋市教育委員会参事 小崎 昭一 氏 講義・実習「仲間づくりのレクリエーション①」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山 直樹 氏	講義・実習「仲間づくりのレクリエーション②」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 横山 直樹 氏	講義・実習「体験を学ぶにつなげるサイクル」 講師 元前橋市教育委員会参事 小崎昭一 氏 情報交換会

11月24日 (土)	講義・実習「野外炊事」 講師 国立赤城青少年交流の家 企画指導専門職 梁河 昌彦 氏 実習「あかぎの自然体験プログラム」 講師 公益財団法人キープ協会 環境教育事業部主席研究員 増田 直広 氏	講義「自然体験活動と子どもの 変容」 講師 公益財団法人キープ協 会環境教育事業部主席研 究員 増田 直広 氏 講義「学校教育における体験活 動の意義」 講師 聖心女子大学非常勤講 師 小林 道正 氏	履修認定試験
---------------	---	--	--------

## 5. 主な活動内容

### 第1回



「仲間づくりのレクリエーション①」



「あかぎの自然体験プログラム」



「学校教育における体験活動の意義」

### 第2回



「学校教育の現状と体験活動」



「仲間づくりのレクリエーション②」

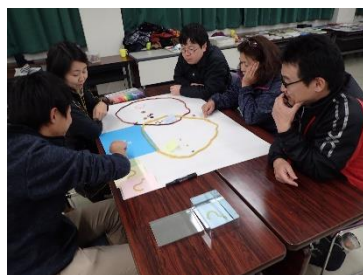


「野外炊事」

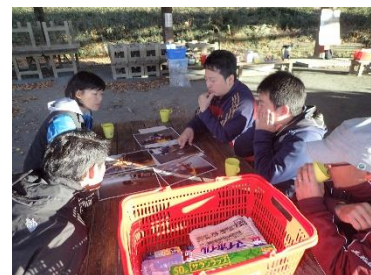
### 第3回



「仲間づくりのレクリエーション①」



「体験を学びにつなげるサイクル」



「野外炊事」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

第1回	満足38名(97%)	やや満足1名(3%)	やや不満0名	不満0名
第2回	満足28名(97%)	やや満足1名(3%)	やや不満0名	不満0名
第3回	満足26名(87%)	やや満足4名(13%)	やや不満0名	不満0名

## (2) 参加者の声

- 第1回 ・同じ仲間たちと同じ講習を受け、自分に対しての気付きや見つめ直すよい場となった。
- ・自分自身の自己肯定感を高めることができた。
  - ・子どもと向き合う本質を学び直すことができた。
- 第2回 ・座学だけでは得られない気持ちの変化がありました。勇気を出して参加して本当に良かったです。
- ・全てが本当に良く、学ぶことができました。参加して本当に良かったです。また、ここで沢山の笑顔に出会えました。それを今度は子供達にも伝えていきたいと思います。
  - ・人との距離がどんどん縮まっていくことと同時に、活動の楽しさや、その活動のもつ力が分かり、自然体験活動の良さが実体験できました。
  - ・3日間を通して目からウロコの体験、知識が得られ、考え方も変わりました。すぐにも実践を活かし、教師として精進してがんばりたいです。
- 第3回 ・チームでやりとげた感動を子どもたちにも感じてもらえるように、学んだことを持ち帰って次の学びへ繋げていきたいと思います。
- ・自然体験活動の有用性や効果、方法について改めて知る機会となり、有意義な研修になりました。
  - ・普段の学校生活ではできないことばかりで、勉強になりました。

## (3) 成果

- 第1回 ・「仲間づくりのプログラム」、教室でも行えるあかぎアドベンチャープログラムは、参加者から「明日からすぐにでも使いたい」、「学校に戻ったらやってみたい」などの意見をたくさんいただくほど好評であった。
- ・プログラム全体を貫く「体験活動の重要性、交流することの良さ」に参加者が気付き、その良さを参加者同士で共有することができた。
- 第2回 ・7月同様に、「教室でも行えるあかぎアドベンチャープログラム」は、参加者から「明日からすぐにでも使いたい」、「学校に戻ったらやってみたい」などの意見をたくさんいただいた。
- ・また、大滝の自然や立地環境を活かしながら、プログラム全体を貫く「体験活動の重要性、交流することの良さ」に参加者が気付き、その良さを参加者同士で共有することができた。
- 第3回 ・参加者から「体験することで、理解が深まったと感じた。」との意見があることから、講義だけではなく、体験活動を組み合わせ、体験活動のサイクルを実際に体験することは、理論の理解を深め、プログラムの満足度を高めることにつながると言える。

## (4) 課題

- 第1回 ・実施期間が繁忙期であったため、参加者の活動場所が限定されてしまうことがあった。事前にきちんと活動プログラムを調整していく必要があった。
- 第2回 ・繁忙期に職員が2名、事務室を空けることや、大滝までの道のりが遠いことが課題として挙げられる。
- 第3回 ・1泊2日の日程は、1日9時間の活動を設定するために、休憩の時間を設定するのが難しい。また、食事の時間も短くなってしまふ。そして、1日目の開始時刻が早く（今回は8時30分）、履修試験終了も遅くなってしまふ（17時45分）。

第1回担当： 企画指導専門職 梁河 昌彦  
第2回担当：主任企画指導専門職 田村 佳之  
第3回担当： 企画指導専門職 横山 直樹

国際交流事業〈文部科学省委託事業〉

「日独青少年指導者セミナーA2」

1. 趣旨

日本とドイツの青少年教育の現状や取り組みを理解し、両国の指導者が意見交換することを通して青少年指導者の資質や能力の向上を図る。

2. 事業の概要

(1) 期日

平成30年5月17日(木)～22日(火)

(2) 参加者

①参加対象 ドイツ連邦共和国在住で、青少年教育行政、青少年団体等で指導にあたる専門家でドイツ政府・ドイツ側実施機関であるドイツ連邦共和国国際ユースワーク専門機関・ベルリン日独センターにより選出された者

②参加人数 11名(男子4名、女子7名)

③参加者の内訳 ドイツ団員8名、団長1名、通訳1名、本部担当1名

3. 企画運営のポイント

- ・A2団のテーマは「子供と若者に優しい社会の実現・子供の居場所」である。ドイツ団員には福祉関係従事者が多く、福祉関係の見学先を希望する声が大きかったため、前橋・高崎周辺の福祉関係施設を訪問先として選ぶ。また、東京プログラムを補完するような、地域での取り組みを中心とした訪問場所を設定する。
- ・日本文化体験の機会として、全国一の生産量を誇る群馬の達磨にちなんだ、少林山達磨寺と、ドイツ団員の興味・関心が高い、世界遺産の日光東照宮を見学先として設定する。

4. 日程

	午前	午後	夜
5月17日 (木)	・東京～高崎到着 ・少林山達磨寺見学	・児童養護施設 希望館訪問 ・愛育乳児園訪問	・群馬県庁31階で夕食
5月18日 (金)	・群馬大学訪問	・サンデンフォレスト 森のhahako園訪問 ・ホームステイ開始	・ホームステイ
5月19日 (土)	・終日ホームステイ		
5月20日 (日)	・ホームステイ終了	・福豚の里とんとん広場(ざわ ざわ森)にてお別れパーティ ・赤城青少年交流の家の説明	
5月21日 (月)	・日光東照宮見学		
5月22日 (火)	・群馬県中央児童相談所訪問	・高崎駅発～東京	

## 5. 主な活動内容



「少林山達磨寺」



「児童養護施設」



「乳児院」



「群馬大学」



「森の hahako 園」



「日光東照宮」

## 6. 成果と課題

### (1) 参加者（ドイツ団員）の声

- ・赤城でのプログラムは少しリラックスして臨めた。赤城でのプログラムもとてもよく計画されていた。都会の雰囲気味わった東京の後に、赤城青少年交流の家周辺の閑静な場所へ移動し、ここではもっと長く過ごしたいと感じた。
- ・ホームステイは2週間の中で特別な体験だった。ホストファミリーはとてもよく面倒をみてくれ、忘れられない体験をさせてくれた。
- ・愛育乳児園への訪問は自分の中に葛藤を起こさせた。職員の優しさと引き換えの乳児収容の必要性。（このような形の施設はドイツにはない。）
- ・児童相談所の見学では特に松葉氏の講義が、日本における公的な青少年援助について学ぶ手助けとなった。
- ・朝のつどいに参加できたのは良い経験だった。
- ・周辺環境（景色、竹林）、施設、宿泊部屋（2棟の「別荘」に分かれたのはグループ内の交流という観点では大変良かった。）、食事はすべて素晴らしかった。
- ・赤城到着日のプログラムが多すぎ、すぐに移動しなければならなかった。達磨寺訪問後2つの訪問先があった。
- ・森の hahako 園への訪問はより時間をかけるべきだった。私たちの訪問では非常に意義のある意見交換の最中に中断しなければならなかった。

### (2) 成果

東京プログラムを補完し、深める赤城プログラムという位置づけで計画した。参加者の声からも、研修内容の深まりを感じることができ、その役割を果たせたと考える。

### (3) 課題

日程の都合上、初日に訪問する場所が多くなってしまった。訪問先を1つにするなど、訪問場所数と時間配分を検討し、じっくりディスカッションするための時間を確保することも必要である。

担当 企画指導専門職 田村 佳之

## 「 イングリッシュアドベンチャー 」

### ～赤城の森で英語体験～

#### 1. 趣旨

2020年度の小学校新学習指導要領の本格実施に向け、国立の教育機関として、教育内容の改善と充実を目指し、本事業を実施する。昨今の保護者の英語教育に対する関心やニーズは高く、新学習指導要領の内容をプログラムに取り入れながら、英語をコミュニケーションツールとして位置づけ、小学生の体験活動を推進する一助とする。

#### 2. 事業の概要

##### (1) 期日

第1回 平成30年 7月21日(土)～7月22日(日)

第2回 平成30年 9月15日(土)～9月16日(日)

第3回 平成30年11月24日(土)～11月25日(日)

##### (2) 参加者

###### ①参加対象

第1回 小学校6年生

第2回 小学校4年生

第3回 小学校5年生

###### ②参加人数

第1回 23名(男子11名、女子12名)〈応募総数30名〉

第2回 23名(男子13名、女子10名)〈応募総数45名〉

第3回 23名(男子11名、女子12名)〈応募総数37名〉

###### ③参加者の内訳

第1回 群馬県前橋市16名、高崎市1名、渋川市1名、沼田市1名、  
埼玉県深谷市3名、新潟県新発田市1名

第2回 群馬県前橋市19名、高崎市1名、太田市2名、玉村町1名、

第3回 群馬県前橋市18名、渋川市1名、太田市1名、吉岡町1名、  
東京都立川市1名、茨城県古河市1名、

#### 3. 企画運営のポイント

- ・体験活動を中心に据え、積極的に英語を用いてコミュニケーションを行いたいと思う場面を意図的に設定し、楽しみながら英語に親しみ、英語を使ってコミュニケーションをしてみたいと思わせるプログラム構成にする。
- ・野外炊事や自然体験活動に係るプログラムについては、事前に当所職員が外部講師に対して進行方法や安全管理等の事前指導を行う。外部講師は各プログラムの中でパネル等を活用するなど、小学生が英語を使いやすい雰囲気づくりを行う。

#### 4. 英語の講師

第1回 (株)学研プラス 山之内 麻美 氏 Desiree Lobetana 氏

第2回 (株)学研プラス 樋口 佳苗 氏 Friedmann David William 氏

第3回 前橋市教育委員会 Jaime Ota 氏 David Carolan 氏

## 5. 日程

### 第1回

	午 前	午 後	夜
7月21日 (土)	開会式 仲間と英語ではじめまして！ ・アイスブレイク ・スカベンジャーハント	英語を使ってドラム缶ピザ作り ・デザートピザコンテスト	英語を使ってキャンプファイヤー ・英語の歌遊び (ロンドン橋落ちたなど) ・スモアづくり
7月22日 (日)	英語で自分の町を紹介しよう① ・スキット作成 ・リハーサル	英語で自分の町を紹介しよう② ・ポスターセッション 振り返り、閉会式	

### 第2回

	午 前	午 後	夜
9月15日 (土)	開会式 仲間と英語ではじめまして！ ・アイスブレイク ・スカベンジャーハント	英語を使ってドラム缶ピザ作り ・デザートピザコンテスト	英語を使ってキャンプファイヤー ・英語の歌遊び (Hokey Pokey など) ・スモアづくり
9月16日 (日)	英語でお店屋さんを開こう① ・開店準備 ・リハーサル	英語でお店屋さんを開こう② ・英語を使って買い物 振り返り、閉会式	

### 第3回

	午 前	午 後	夜
11月24日 (土)	開会式 仲間と英語ではじめまして！ ・アイスブレイク ・スカベンジャーハント	英語を使ってドラム缶ピザ作り ・デザートピザコンテスト	英語を使ってキャンプファイヤー ・英語の歌遊び (Hokey Pokey、ロンドン橋落ちたなど) ・スモアづくり
11月25日 (日)	イングリッシュレストラン① ・開店準備 ・リハーサル	イングリッシュレストラン② ・英語を使って買い物 振り返り、閉会式	

## 6. 主な活動内容

### 第1回



「ドラム缶でデザートピザ作り」



「キャンプファイヤーで英語の歌遊び」



「ポスターセッション (自分の町を紹介)」



## 第2回



「He (She) likes… アイスブレイク」



「ドラム缶でデザートピザ作り」



「英語でお店屋さんを開こう」

## 第3回



「講師によるインストラクション」



「ドラム缶でピザ生地を焼く」



「イングリッシュレストラン」

## 7. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

第1回	満足22名(96%)	やや満足1名(4%)	やや不満0名	不満0名
第2回	満足18名(78%)	やや満足5名(22%)	やや不満0名	不満0名
第3回	満足22名(96%)	やや満足1名(4%)	やや不満0名	不満0名

### (2) 参加者の声

- 第1回
- ・英語は好きじゃなかったけど、英語を通じて楽しいこととか、外国の文化が知れて、好きになった。
  - ・このキャンプで、英語がそんなに好きではなかったけど、興味をもつことができました。とても楽しかったです。
  - ・1泊2日で短い時間だったけど、英語が好きになり、少し上達し、友達をいっぱい作れたので参加して良かったです。
  - ・たくさん友達ができ、それに英語力も身についたので、参加して良かったなと思いました。今思うと、すごく短い時間だなと思いました！
- 第2回
- ・このプログラムをとおして、英語をもっと使って話したいと思った。
  - ・たくさんの英語が学べて、楽しかったです。
  - ・ほかの学校の人と友達になれた。
  - ・次もこのようなプログラムがあったら参加したい。
- 第3回
- ・英語はもともと好きだけど、イングリッシュアドベンチャーに来て、もっと好きになった。
  - ・最初は知っている人がいなくて不安だったけど、みんながやさしく声をかけてくれたので、2日間とても仲良くなることができ、うれしかった。
  - ・英語の楽しさが一段と増したと思い、これからも続けようと思った。
  - ・24日に会ったばかりなのに、とっても仲良くできた友達がいる、とってもうれしかったです。特に寝る前に少し話をしてとっても楽しかったです。
  - ・チームリーダーがリードしてくれてありがたかった。

### (3) 成果

- 第1回
- ・今回初めて企画した、学習指導要領に対応した自分の町を紹介するポスターセッションでは、英語をコミュニケーションツールとして用いながら、体験活動

の楽しさや英語でコミュニケーションをすることの楽しさを実感でき、これからも英語を学ぼうとするきっかけとなった。

- ・参加の動機は「保護者に勧められた」が一番多かったことから、保護者の英語に関する意識が高いことが見受けられた。「保護者に勧められて」参加した子供達がプログラムを進めるなかで、人間関係が深まり、友達が増え、充実した体験活動ができ、満足度がとても高まったため、体験活動を推進するという役割が果たせたと考える。

- 第2回
- ・前回（7月）のポスターセッションの様子を踏まえ、今回はお店屋さんで買い物をするという場面設定をし、店員とお客という役で英語を使った会話を促すことで、英語による活発な受け答えが見られた。理由としては、①買い物というシチュエーションは子供達にとって日常的であること。②前日のデザートピザ作りから「～を下さい。」を繰り返し使い、意識付けた。③発表ではないため、繰り返し英語を使うことができる。ということが考えられる。
  - ・日常的な生活の場面で英語を使うことが、活発に英語を使い、コミュニケーションを促進させることにつながるとということが分かった。
  - ・初日は初対面で緊張していた参加者が仲良くなり、次の日には英語を使って積極的にコミュニケーションを取れるようになった背景には、宝探しやキャンプファイヤー、デザートピザ作りなどの体験活動が効果的に機能していたことが実証できた。

- 第3回
- ・今回は、前橋市教育委員会の協力を得て、ALT 2名を講師として迎えることができた。
  - ・「イングリッシュレストラン」は学習指導要領に対応した英語活動であり、教科書「We can !」のビュッフェ形式レストランの単元をベースとしながら、実際に当日の赤城のレストランのメニューもその中に加えて、自分の食べたいものを英語で伝え、メニューを完成させる活動を行うことで、体験活動の楽しさや英語でコミュニケーションをすることの楽しさを実感でき、これからも英語を学ぼうとするきっかけとなった。

#### (4) 課題

- 第1回
- ・小学6年生では、全ての活動を英語の説明で通すということは難しく、個人の英語習得状況の差が大きい。どのレベルを基準として設定するかが難しいが「この言葉は英語を使おう」と、使うべき言葉や表現を例示したり強調したりすることで、英語でのコミュニケーションを促すことが可能となると考える。
  - ・講師や班付きリーダーが積極的に英語を使い続けていくことや、日本語の問いに対して英語で答えるなど、英語でのやりとりを増やすことが必要である。
- 第2回
- ・講師が全て英語で話しかけると分からない言葉が多すぎるため、最後まで聞いてもらえない子供が多くいた。小学4年生では、全ての活動を英語の説明で通すと理解ができないため、指示を徹底する事項には、職員が日本語で最小限度の補足説明を行う必要がある。
  - ・体験活動や宿舎での生活の場面では、英語でのコミュニケーションを増やすために、講師や班付きリーダーが積極的に英語で話しかけていくことが必要である。
- 第3回
- ・ALTに講師を依頼しているため、プログラム進行や英語活動の打ち合わせを念入りに行う必要がある。このため、通常事業より打ち合わせ回数が多くなってしまっているので、講師が日程調整するのが大変である。
  - ・打合せ内容についてはこちらの意見と講師の意見を摺り合わせながら、より良い活動を作りあげることが必要である。

担当 主任企画指導専門職 田村 佳之

## 国際交流事業

# 「 イングリッシュキャンプ 」

## ～赤城の森での国内留学～

### 1. 趣旨

外国人講師と一緒に楽しみながら、英語をコミュニケーションの手段として用いる。そして、野外炊事やオリエンテーションなどの活動を体験することを通して、英語を聞いたり話したりすることに自信をもち、英語への関心をもてるようにする。

### 2. 事業の概要

#### (1) 期日

平成30年8月12日(日)～14日(火)

#### (2) 参加者

①参加対象 中学校1、2年生

②参加人数 32名(男子14名、女子18名)

(中学1年生22人、中学2年生10人〈応募総数36名〉)

③参加者の内訳 群馬県前橋市19名、高崎市1名、渋川市2名、太田市1名、安中市1名、吉岡町4名、桐生市1名、東京都立川市1名、石川県金沢市1名、茨城県古河市1名

### 3. 企画運営のポイント

- ・体験活動を中心にプログラムを構成する。
- ・コミュニケーションの手段として、積極的に英語を用いる場面を意図的に設定する。

### 4. 英語の講師

- ・(株)アイエスエイ Mr. Macpaul Chukuemeka Ekwueme 氏
- ・(株)アイエスエイ Ms. Rei Miyazaki 氏

### 5. 日程

	午前	午後	夜
8月12日 (日)		開会式 アイスブレイク スピーキング 英語を使いながらカレーを作ろう	ファンタイム (パルーンリレー、英語の曲によるダンス)
8月13日 (月)	ウォームアップ スピーキング リスニング	英語を使って、オリエンテーリング スピーキング 発表の準備をしよう (日本の文化を紹介しよう)	発表の準備をしよう (日本の文化を紹介しよう)
8月14日 (火)	ウォームアップ 日本の文化を紹介しよう (発表) 閉会式		

## 6. 主な活動内容



英語を使っのカレーライスづくり



英語で話しながらのオリエンテーリング



プレゼンテーション（日本の文化）

## 7. 成果と課題

### (1) 参加者アンケート結果

満足 2 2 名 (6 9 %)      やや満足 1 0 名 (3 1 %)      やや不満 0 名      不満 0 名

### (2) 参加者の声

- ・ 全て英語を使うので、英語に慣れて言葉がすらすら出てくるようになった。
- ・ 日本文化の発表準備では、新しい英単語を発見したり、言葉を選んだりすることでより英語への関心が高まりました。また、班での活動やチームワークを高めることができました。
- ・ 発表準備の時に講師と一緒に文章を考えて、英語で会話してまだまだ聞き取れないことがたくさんあったので、もっと勉強したい。
- ・ スピーキングとリスニングは基本的な英会話を覚えて、発表ではスピーキングとリスニングもできる点が役に立った。
- ・ オリエンテーリングではチームの人と協力して教え合って活動することで、チームの絆をつくり上げることができた。

### (3) 成果

- ① 3 2 名の定員に対して、3 6 名の応募があり、3 2 名が参加した。参加者の自由記述に「全て英語を使うので、英語に慣れて言葉がすらすら出てくるようになった。」と書かれていることから、英語を使う機会を意図的に設定することで、基本的な英会話を覚えることができ、英語に慣れることができた。
- ② 「講師と一緒に文章を考えて、英語で会話してまだまだ聞き取れないことがたくさんあったので、もっと勉強したい。」と書かれていることから、参加者自身ができないと感じたことであっても、それが学習意欲につながり、英語への興味を高めることができた。
- ③ 野外炊事やオリエンテーリングなどの体験活動を取り入れたことは、チームで英語を教え合うことにつながり、チームの絆を作り上げることができたと考えられる。

### (4) 課題

- ① 「日本の文化を紹介しよう」というテーマでプレゼンテーションを行った。参加者からは、「もうちょっと時間（プレゼンテーションの）が欲しい。」や「難しかった。」と自由記述に書かれていたことから、参加者によっては、このテーマは難易度がやや高かったと考えられる。
- ② 初めて実施したこともあったが、参加者の満足度が 8 0 % に届かなかったことについて次のことが考えられる。プレゼンテーションの活動が「楽しい」だけでなく、難しいことにも挑戦し、乗り越えていくことも大切であることを活動の最初に参加者に伝えなかったことやスピーキングやリスニングの活動に対して、学校の授業と近いものと認識し、参加者の想定していた活動との相違があったことである。

担当 企画指導専門職 横山 直樹

## 「体験の風をおこそう」運動推進事業（出展ブース）」

### 1. 趣旨

群馬県における子供たちの体験活動を推進するとともに、「体験の風をおこそう」運動を広く普及することを目的として、群馬県教育委員会及び学校教育関係者並びに青少年団体による実行委員会を組織し、実行委員の団体及び関係する団体と連携しながらブース出展し、体験活動の場を提供する。

### 2. 事業の概要（期日と参加者）

	参加事業名	期日	参加人数	会場
1	のびゆく子どものつどい	5月20日(日)	209	富士見公民館
2	電力中央研究所 赤城試験センター研究所公開	5月26日(土)	387	電力中央研究所 赤城試験センター
3	赤城ふれあいの森まつり	7月28日(土)	106	ふれあいの森(木の家)
4	群大で遊ぼう	7月29日(日)	297	群馬大学理工学部
5	第14回群馬ちびっ子大学	8月10日(金) ～8月13日(月)	3,082	ヤマダ電機 LABI 高崎
6	ホリデーイン前橋	8月19日(日)	952	ホリデーイン前橋
7	前橋市生涯学習 フェスティバル	8月25日(土) ～8月26日(日)	526	前橋プラザ元気21 生涯学習センター
8	JOMO SO COOL	9月 9日(日)	665	上毛倉庫
9	もりのまつり	10月 7日(日)	594	安中学習の森
10	ふれあいゆうあい 交流フェスタ	10月14日(日)	306	群馬県青少年会館
11	子どもゆめ基金説明会	10月14日(日)	17	前橋市中央公民館
12	第21回富士見産業祭	11月 3日(土)	455	道の駅ふじみ
13	赤城フェスタ2018	11月 4日(日)	216	国立赤城青少年交流の家
14	アウトドアゲーム体験会	11月11日(日)	249	ぐんまこどもの国
15	第9回おおた・まちの先生 見本市	11月25日(日)	488	太田市立休泊小学校
16	体験の風をおこそう フェスティバル2018	12月 1日(土)	2,897	スマーク伊勢崎
17	まえばし初市まつり	1月 9日(水)	366	前橋プラザ元気21
18	体験の風をおこそう in 前橋市児童文化センター	1月19日(土)	469	前橋市児童文化センター

19	体験の風をおこそう フェスティバル2018	1月26日(土)	2,518	イオンモール高崎
20	体験の風をおこそう in 群馬県立ぐんま昆虫の森	1月27日(日)	130	群馬県立ぐんま昆虫の森
21	体験の風をおこそう in アゼリアモール	2月 2日(土)	158	館林 AZALEA MALL
	合 計		15,087	

### 3. 企画運営のポイント

- ・県内の様々な施設で開催されるイベントにブース出展を行い、缶バッジ作りやかんな箸作りなどの手軽にできる体験活動を多くの子供たちに提供する。
- ・大型ショッピングモール等で「体験の風をおこそう」フェスティバルを開催し、近隣地域の幼児・小学生の親子を中心に様々な体験活動を提供する。

### 4. 事業の様子



「のびゆく子どものつどい」



「群馬ちびっ子大学」



「生涯学習フェスティバル」



「赤城フェスタ 2018」



「まえばし初市まつり」



「体験の風をおこそうフェスティバル」

### 5. 成果と課題

#### (1) 成果

- ・幼児・小学生だけでなく親子で様々な体験活動に参加できる機会と場を提供することができた。また、保護者には、体験活動の意義や魅力を発信することができた。

#### (2) 課題

- ・連携施設と行事等が重ならないように、早めに日程調整を行う。

担当 企画指導専門職 梁河 昌彦

## 平成30年度 国立赤城青少年交流の家職員

所	長	松村	純子
次	長	穴澤	忠弘
主任企画指導専門職		田村	佳之
企画指導専門職		小倉	祐司
企画指導専門職		梁河	昌彦
企画指導専門職		横山	直樹
企画指導専門職		田村	文明
事業推進係長		丸山	峰樹
事業推進係		渡邊	あゆみ
事業推進係		大工原	仁志
事業推進係		山下	順子
事業推進係		阿佐美	幸子
事業推進係		手島	まき子
事業推進係		小林	恵
事業推進係		寺田	里美
総務係長		池守	善洋
総務係		鈴木	和子
総務係		間瀬	咲樹花
管理係長		齊藤	勇一
管理係		岡	一成
管理係		新井	淳
管理係		佐藤	順彦

平成30年度 国立赤城青少年交流の家事業報告書

平成31年3月

編集・発行 独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立赤城青少年交流の家

〒371-0101 群馬県前橋市富士見町赤城山 27

TEL 027-289-7224 FAX 027-289-7226

URL <https://akagi.niye.go.jp/>

E-mail [akagi@niye.go.jp](mailto:akagi@niye.go.jp)